第３章　高専本科卒業生の現状について

３．１　はじめに

本章では，本科卒業生に対するアンケート結果をもとに，本科卒業生の現状に関する分析，考察を行った。アンケート集計結果は本報告書の最後に付録として添付されており，本文中でそれらを引用する際は，本科卒業生アンケートは【本科１－１】のように表す。ここで，１－１は質問の番号に対応している。

今回のアンケートの対象となった本科卒業生の総数は，昭和 54 年 3 月から平成 19 年 3 月までに卒業した 3,327 名である。その内，回答が得られたのは 583 名であり，回収率は 17.5%となった。回答者の性別，年齢，卒業年，学科の内訳は【本科１－１～１－３】に示すとおりである。

回答者の男女比は 8：2 で男性回答者が多い。年齢層は 20 歳から 49 歳まであり，各年齢によって回答者数の多少はあるが，各年令共 10 人以上の人が回答している。卒業年については若干のばらつきはあり，学科別回答数については土木建築工学科が多いが，ほぼ 3 学科とも同程度の回等数を示している。【本科１－４，１－５】は回答者の現在の身分および最終学歴を示している。回答者の 85%が社会人, 10%が学生でその他は 5%であり, 最終学歴は本科卒業が 8 割弱を占め，２割強は大学，大学院，専攻科在学中となっている。取得学位は準学士が 8 割，修士が 9%，学士が 8%，博士が 2%である。高専在学中に資格を取得したものは 43%，就職後に資格を取得したものは 7 割いる。

アンケート結果分析および考察の視点としては以下の 3 点を基本とした。

１）本科卒業生の就職先企業の傾向分析

２）会社における卒業生の自己評価

３）前回（平成 14 年度）調査におけるアンケート結果との比較，検討

３．２　本科卒業生の現状

（１）就職先企業について

図３．２－１に就職先企業の業種を示す。機械電気工学科の卒業生（ME）の業種では機械が最多で，次に化学，電気機器，と同率で並んでいる。情報電子工学科の卒業生（IE）の業種は情報サービス業が最多で，次いで電気機器と同率で並んでおり，電気・ガス業，通信業，その他サービス業と続いている。土木建築工学科の卒業生の半分を占める最多が建設業，次いで地方自治体の公務員関係，サービス業が主な業種となっている。これらより，各専門分野に代表される業種の次にサービス業がどの分野においても重要な業種となっていると言える。

就職先企業の資本金については【本科２－２】に示している。ME では，6 割程度が資本金 10 億以上の大企業，3 割が中小企業，1 割が官公庁で働いている。IE では 5 割程度が大企業，4 割程度が中小企業，1 割程度が官公庁で仕事をしている。CA では 3 割程度が大企業，3 割程度が中小企業，4 割程度が官公庁で仕事をしている。全体を平均すると，回答者の 5 割程度が大企業，3 割程度が中小企業，2 割程度が官公庁で働いていることになる。【本科２－３】は就職先の職種を示している。これによると ME，IE は研究開発，設計，システムエンジニアが多い。CA は施工管理，設計が主な業種となっている。いずれの科においても職種分類の「その他」の割合が 1/4 弱程度を占めていることが共通した特徴としてみられる。

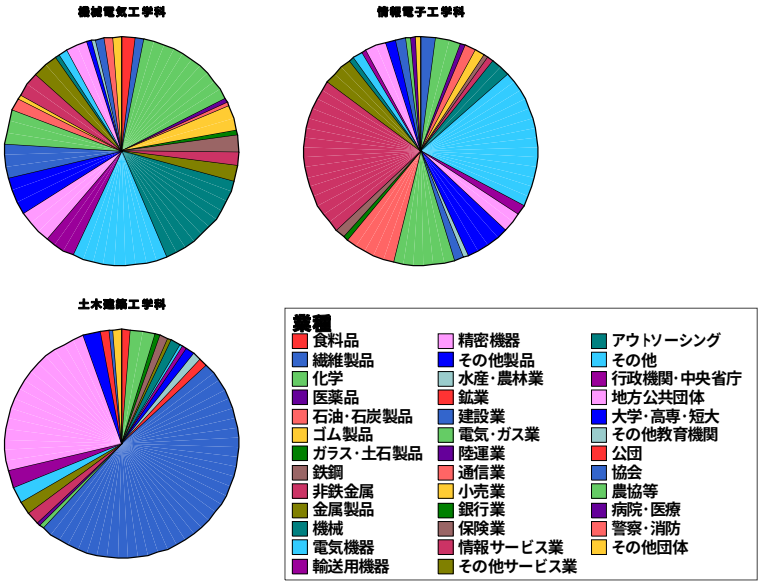


図３．２－１　就職先企業業種

現在の役職を示したものが**図３．２－２**（【本科２－４】）である。前回の調査では「役職なし」が半数を占め，役職としては主任，課長がほぼ同率で多く，その次に係長の順になっている。割合は少ないが，取締役や社長に就任している卒業生もいた。今回の調査では「役職無し」は 37%と減り，役職があるものは 57%と増えた。5 年間で昇進した実績を示すものである。

図３．２－２（【本科２－１１】）は，学歴に対応した待遇を受けているか否かに対する集計結果である。ほぼ 7 割は現在の待遇に満足し，3 割の人はやや不満，不満を示している。

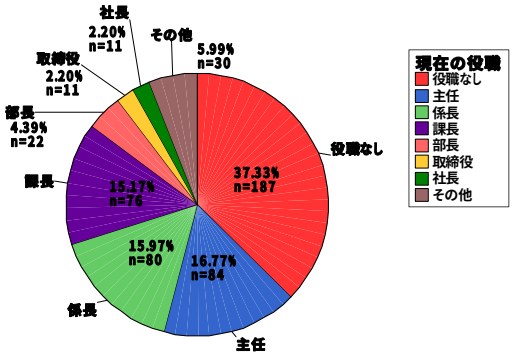


図３．２－２　職場での役職

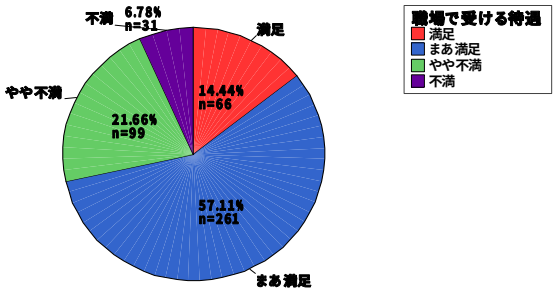


図３．２－３　職場における待遇

（2）会社における卒業生の自己評価について

仕事のやりがいに関する集計結果は【本科２－５】に示されている。この結果では，各科卒業生とも大差はなく，総合すると，“とても感じる”，“わりと感じる”が８割を占めており，卒業生の仕事への前向きな姿勢が窺える。また，【本科２－６】は仕事にやりがいを感じないことの要因を調べたものである。第１位は待遇，次が職種の不一致となっている。会社において自分の能力を発揮できているかに関する集計結果は【本科２－８】に示されている。これより，9 割近くの卒業生が職場での能力発揮を自己評価しており仕事のやりがいとリンクした結果となっている。

図３．２－４（【本科２－１９】）は，自分が同年代の大学卒業生と比べて会社で優れていると評価されていると思う項目の集計結果である。これによると，卒業生は専門知識，行動力，協調性，誠実さ，パソコン他情報技術に関する能力を高く評価している。このような自己評価は単なる自己満足ではなく，**図３．２－５**が示すように企業の評価ともほぼ一致している。しかし，それ以外の項目は軒並み低い評価となっており，語学力についてはほとんど評価されていないので大きな課題であろう。他の能力も向上させることが課題である。

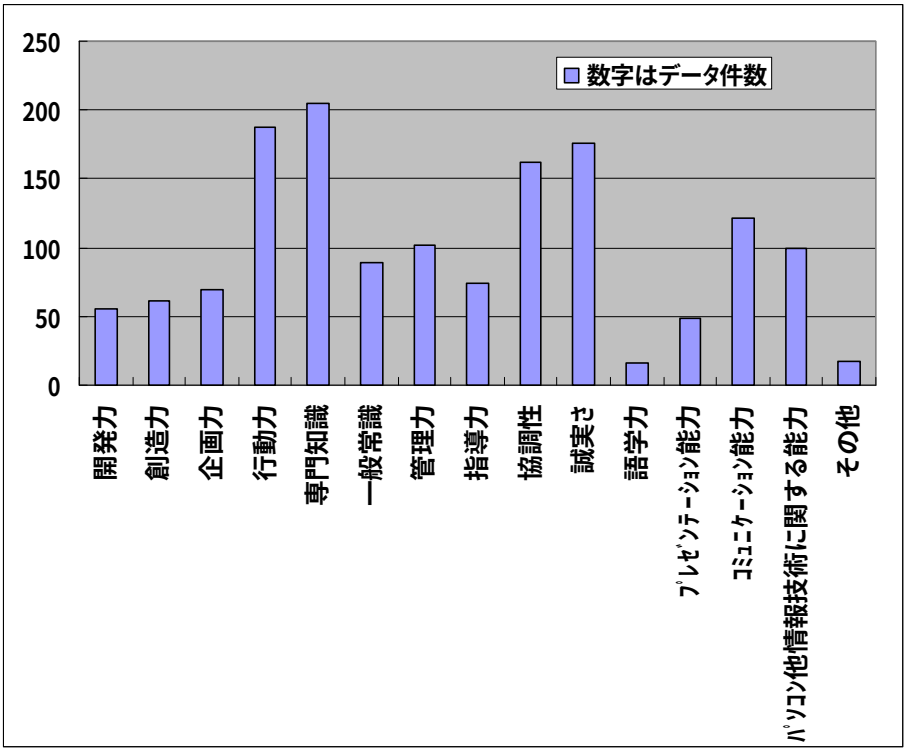


図３．２－４　自分が会社で評価を受けていると思うこと

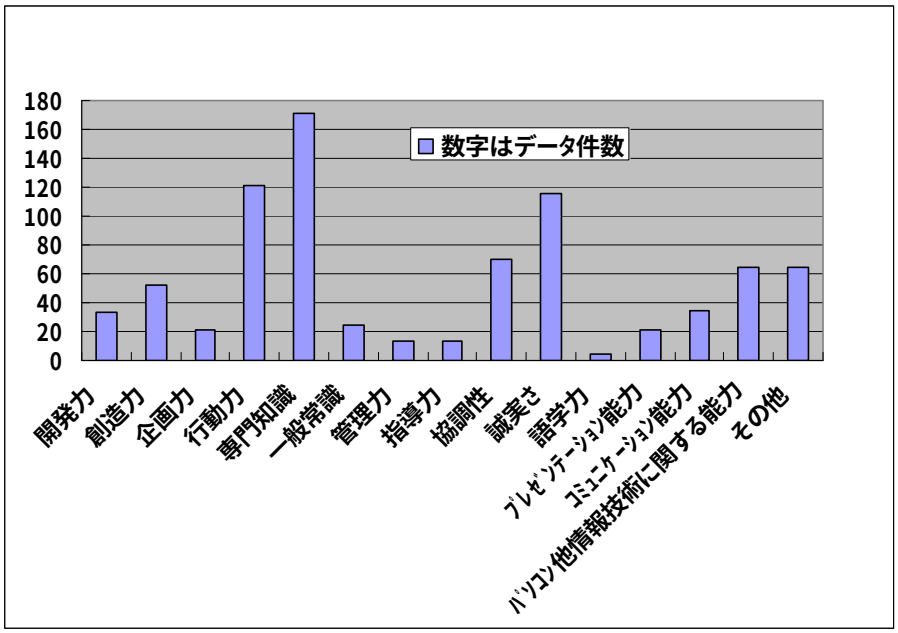


図３．２－５　企業が評価している高専生の能力

【本科２－２２】は，これまでの進路に関する良否の集計結果を示している。その結果では，高専を選んで良かったという意見が８割強を占めており，徳山高専での教育がしっかりなされてきたことを示している。**図３．２－６**（【本科２－２３】）は，回答者が現在の生活を総合評価した結果である。学科毎に差異はないが，最終学歴についてみると学歴の高さに従って不満，やや不満が減少している傾向が見られる。これは待遇等の問題と絡んでいると思われる（【本科２－２３】参照）。全体的にみると，やや不満，不満が１割程度あるものの回答者の大部分は現在の生活に満足していると考えられる。14 年度調査とほとんど差はない。

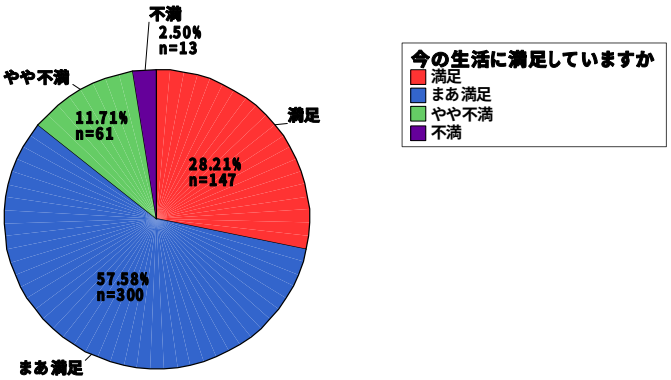
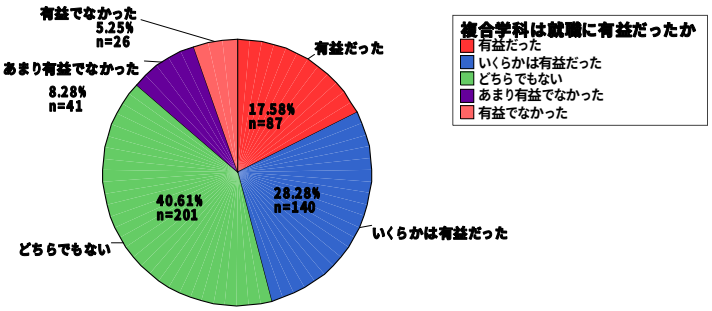


図３．２－６　今の生活に関する総合評価

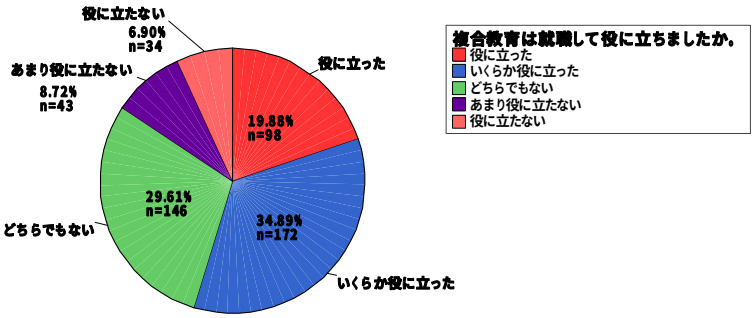
（３）複合学科の評価について

複合学科（機械・電気，情報・電子，土木・建築）の２分野にまたがる複合教育をしていることが，企業に就職する際に有益でしたかとする問いには，有益だったが 18%，いくらかは有益だったが 28%で，有益以上が半数弱であり，どちらでもないが 41%と最も多く，有益でなかったは 5%と最も少ない。3 学科全体としての複合学科の有益性は半数は評価している。学科別では機械電気工学科の有益性が高く，次は情報電子で，土木建築工学科の有益性は 35%程度で最も低くなっている。

複合教育を受けたことが，就職して役に立ちましたか。（職場で重宝がられていますか。）という問いには，役に立ったが 20%，いくらか役に立ったが 35%であり，どちらでもないが 30%と多いものの 55%は役に立っており，就職する際よりも就職してからのほうが複合学科の評価は若干高くなっている。学科別では機械電気工学科が 63%，情報電子が 61%とほぼ同列に役立っている意識が高く，土木建築工学科では 45%となったが，それでも就職してからのほうが役立つ意識が高くなった。



複合学科の就職時の有益性



複合学科の就職後の有益性

３．３　前回（平成 14 年調査）結果との比較

今回行われたアンケート（以下，19 年アンケート）と平成 14 年アンケート（以下，14 年アンケート）に共通する項目に関して比較, 検討を行った。14 年アンケートの回収数は 288 名である。

（１）就職先企業，役職

図３．３－１は，14 年アンケートにおける就職先企業の資本金に関する集計結果である。ME では 6 割が資本金 10 億円を越える大企業, 3 割が中小企業に就職しており, 官公庁は 1 割である。IE では 5 割が大企業，4 割程度が中小企業に就職している。CA では 3 割程度が大企業，3 割程度が中小企業，2 割程度が官公庁に就職している。19 年アンケートの結果と比較すると，大きな差異はない。しかし，昭和 63 年の同窓会調査から見ると，どの学科においても大企業就職が約 1 割減少し，それが官公庁の増分となっている。**図３．３－２**は職種に関する集計結果である。主要な職種は 19 年アンケートと比べて各科とも大きな変化はない。ME は設計・研究開発・生産管理・施工管理の順に多く，IE はシステムエンジニア，研究開発，設計の順に多くなっている。CA は施工管理が最も大きな割合を占め次が設計となっている。しかし，19 年アンケートでは 14 年アンケートに比べて，ME は設計，システムエンジニアの割合が減少し施工管理と生産管理が増え，IE は，システムエンジニアの割合は筆頭であるものの，一般事務，品質管理，生産管理の職種が増えている。CA は施工管理の割合が増加して一般事務も増加している。研究開発と設計の割合に各科とも変化はないが，一般事務や生産管理が各科とも顕著に現れてきている。

図３．３－３は，会社における役職に関する集計結果である。14 年アンケートよりも 19 年アンケートのほうが役職の割合が増え，確実に 5 年間で昇進している実績を示している。

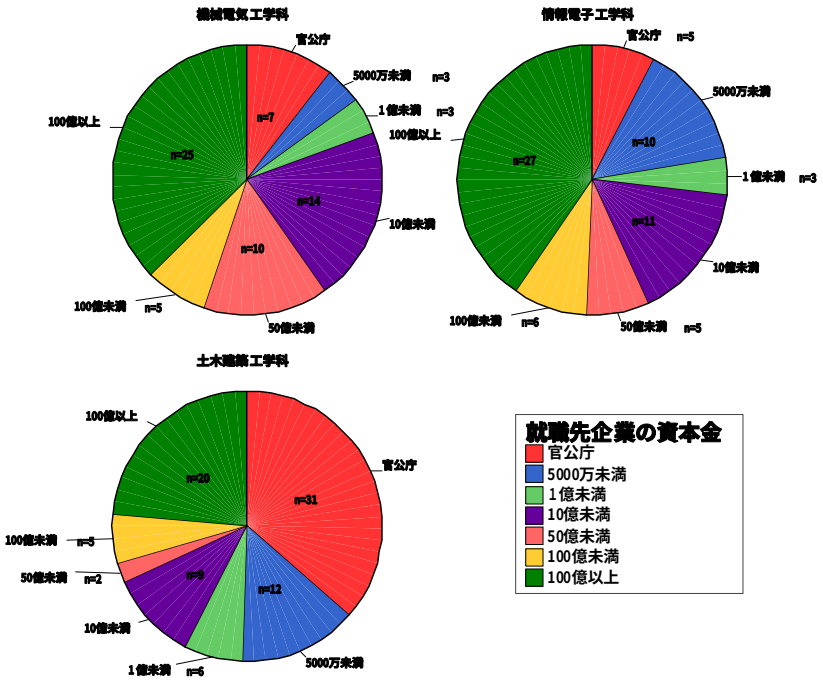


図３．３－１　資本金

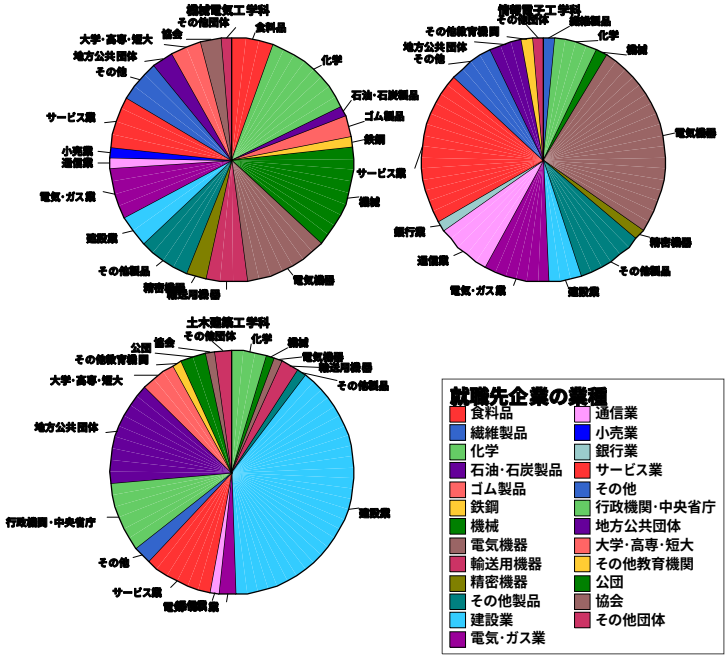


図３．３－２　業種分類

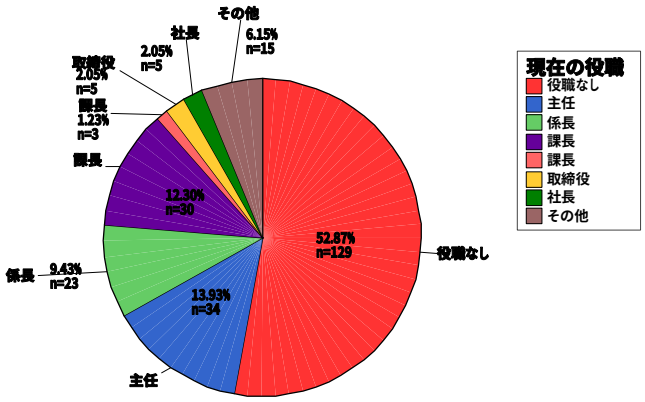


図３．３－３　職場での役職

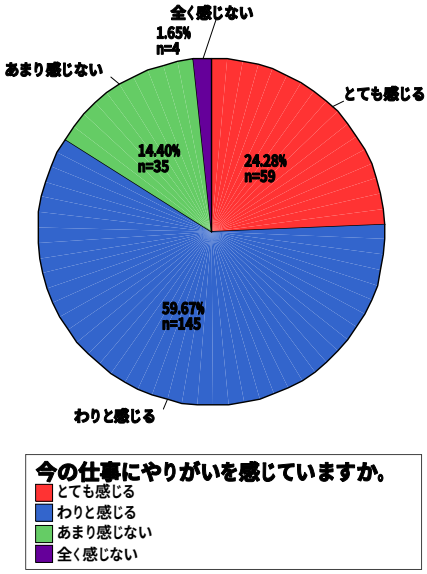


図３．３－４　仕事のやりがい

（２）仕事のやりがい，自己評価

図３．３－４は，仕事のやりがいに関する集計結果である。19 年アンケート結果（【本科２－５】）と全体的傾向を比較してみると，“ とても感じる ”, “ わりと感じる ” を合わせた割合は 80%と高いが 14 年より 3%程度減少し，感じないが 3%程度増えている。

図３．３－５は，同様に職場における能力の発揮について調べた結果である。“ とても発揮している, わりと発揮している ”が 19 年アンケートでは 85.6%, 14 年アンケートでは 85.2%であり，発揮している割合の意識は依然として高く，アンケートでは 5 年間でほとんど変化していない。卒業生の仕事にがんばっている姿がわかる。

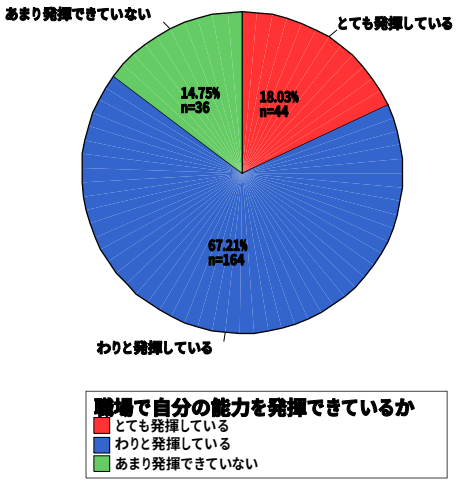
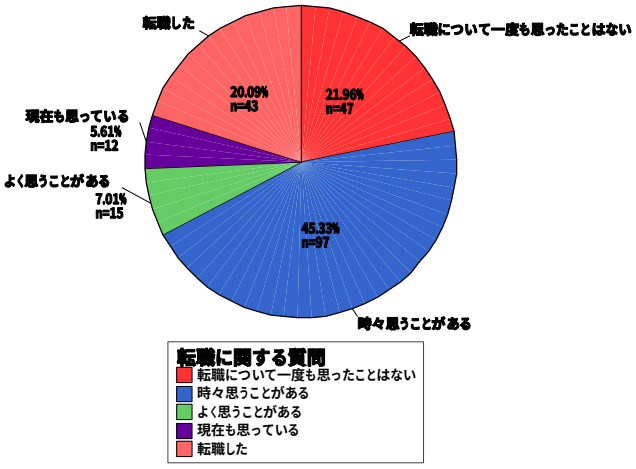


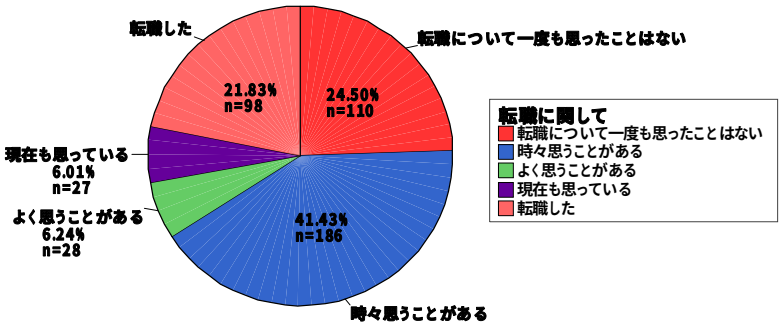
図３．３－５　職場における能力発揮

（3）進路，転職

転職に関する 14 年アンケート結果と 19 年アンケート結果を**図３．３－６**に示す。14 年アンケートでは，転職について考えている割合は 6 割弱であり，転職した人は 20%程度である。一方，19 年アンケートでは，転職について考えている割合は 5 割強であり，転職した人は 22%程度いる。転職について考えている割合は両者において大差はなく，転職願望は潜在的なものと考えられるが転職した人はわずかながら増えている。**図３．３－７**（【本科２－１８】）は 19 年アンケート結果の転職の要因を示している。待遇の問題が最多で，以下就業地域，職種の不一致の順となっている。その他の理由も待遇の問題と同じくらい多く，様々な理由が内包している。



14 年アンケート



19 年アンケート（【本科２－１７】）

図３．３－６　転職について

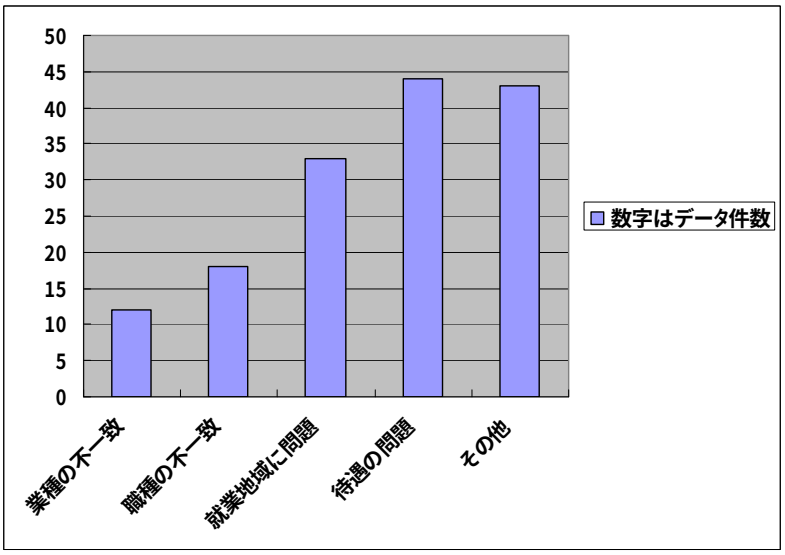
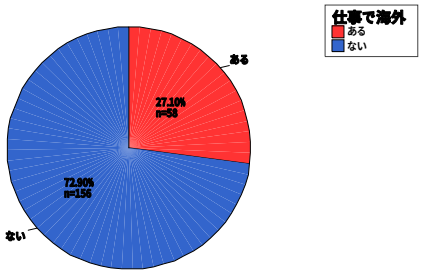
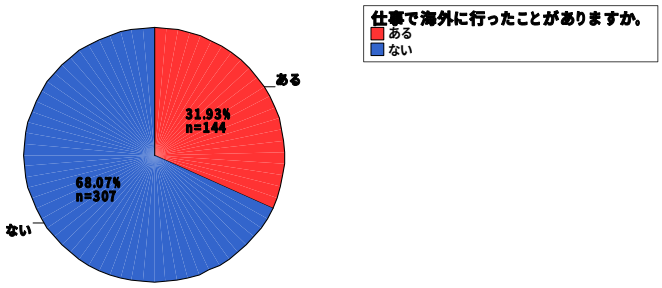


図３．３－７　転職の要因（【本科２－１８】）

（4）英語

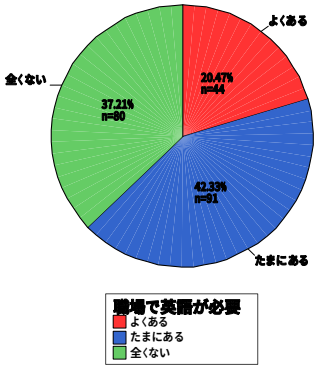
図３．３－８には，仕事での海外経験に関する集計結果である。19 年アンケートの結果において，仕事で海外を経験した割合は 32%，14 年アンケートが 27%であり，5 年間であっても企業における国際化がより進んでいることを示している。**図３．３－９**は，職場における英語の必要性について尋ねた結果である。全体で 6 割は必要としているのは平成 19 年も 14 年も同じであるが，ME，IE は CA に比べて英語の必要になる機会が多いようである。両アンケートにおいて英語が職場で必要になっている割合を比較すると，ME で 5 ポイント増加し，IE と CA はほとんど変化ない。英語力の自己評価は，**図３．３－１０**に見られるように，両アンケートにおいて 8 割超の卒業生に自信がないことを示している。英語力の増強は，上述の企業からの評価もあったように，本高専の重要課題であることは当面変わらない。

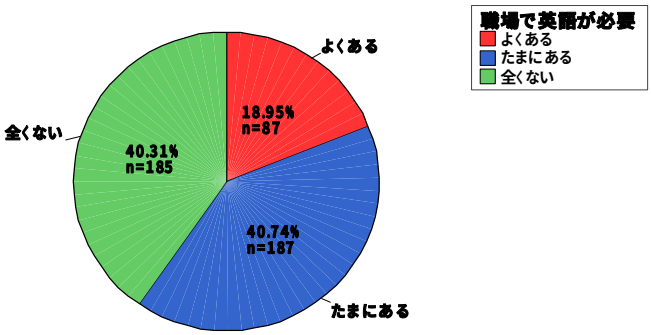




14 年アンケート　　19 年アンケート（【本科２－１５】）

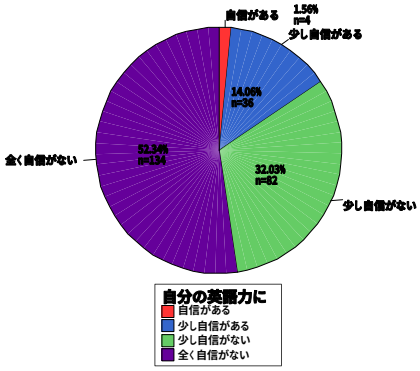
図３－３－８　海外における仕事

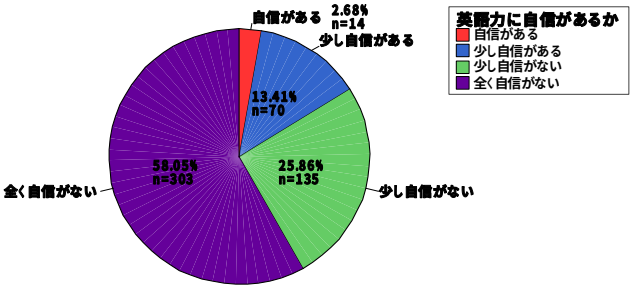




14 年アンケート　　19 年アンケート（【本科２－１６】）

図３．３－９　職場における英語の必要性



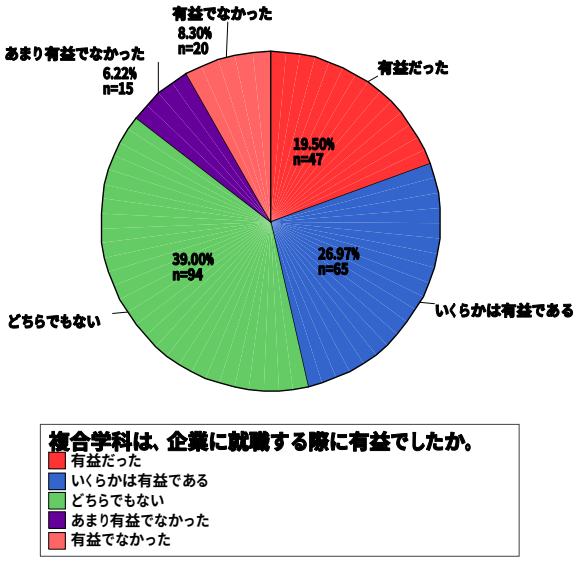


14 年アンケート　　19 年アンケート（【本科２－２４】）

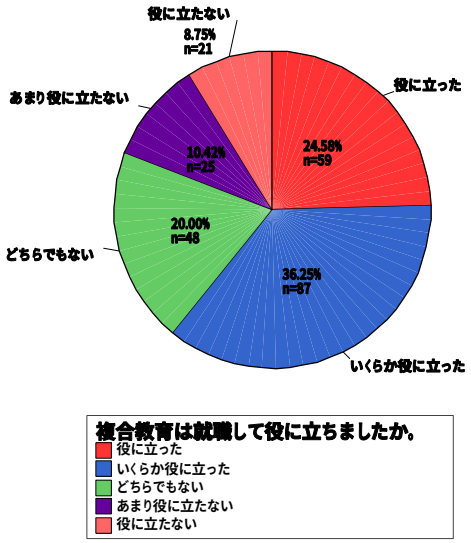
図３．３－１０　自分の英語力に自身があるか

（5）複合学科の評価について

複合学科（機械・電気，情報・電子，土木・建築）の 2 分野にまたがる複合教育をしていることが, 企業に就職する際に有益でしたかとする問いには, 14 年と 19 年ではほとんど変化がない。3 学科全体としての複合学科の有益性は半数は評価している。複合教育を受けたことが，就職して役に立ちましたか。（職場で重宝がられていますか。）という問いも 14 年と 19 年においてはほとんど変化がなく，55%は役に立っており，就職する際よりも就職してからのほうが複合学科の評価は若干高くなっている。



14 年アンケート



19 年アンケート

図３．３－１１　複合学科の就職後の有益性

３．４　本章のまとめ

本科卒業生に対するアンケート結果から卒業生の現状に関する分析，考察を行った。今回 19 年のアンケートに回答頂いた卒業生の就職先としては，5 割程度が大企業，3 割が中小企業，残り 16%が官公庁となっている。その業種については，各専門分野を代表するもののほかに，サービス業の占める割合が目立っており，IE ではそれが最多を示した。また，職種においても各専門分野を代表する業種が最多を占める一方で，その他に分類される職種の割合が全体の 1/4 程度あることが明らかとなった。これらの特徴は，14 年アンケート結果と比較しても大差はない。

本科卒業生は，さまざまな職場において自分の専門知識や協調性，誠実さを自負し，仕事にやりがいを持って活躍している様子がうかがえた。また，彼らは，就職してからの複合学科の有益性を過半数は評価し，学歴に対応した待遇を受け，現在の生活をほぼ満足しているようである。また，会社における活躍ぶりは企業からも評価され，5 年間での職場での昇進も全体的にうかがえるが，英語力不足等のこれから解決しなければならない課題が多いことは依然として変わらない。

14 年アンケートとの比較では，上述の就職先企業の他に，役職や仕事のやりがい，自己評価等に関して検討され，本科卒業生の着実な成長，進歩が推察された。

（担当：熊野）